

民俗芸能における伝統と宗教観念の再生産に関する 調査研究プロジェクト

——沖縄県の「エイサー」の事例から

奥村 哲也

文化人類学・宗教学・日本思想史専門 博士前期課程2年

1. はじめに

本プロジェクトの目的は、近年、沖縄県の一部の行政機関により観光資源化が進められている「エイサー」を取り上げ、その共時的かつ通時的な調査研究をとおして、民俗芸能における伝承の実態を明らかにし、民俗芸能の担い手にとっての伝統や真正性を考察することにある。

「エイサー」は、念仏踊りが起源とされる沖縄の民俗芸能であるが、沖縄観光ブームに伴って沖縄県外にも広く知れ渡ったこともあり、日本全国でその愛好会が設立されている。本プロジェクトのフィールドである沖縄本島中部地域では、「エイサー」が特に盛んにおこなわれている。沖縄市は、平成19年に「エイサーのまち宣言」を制定して多くの「エイサー」イベントを実施するなど、「エイサー」の観光資源化を積極的に進めている。しかし、その一方で、観光資源化にはそれほど積極的ではない同市の一部の地区では、忘れ去られようとしている伝統「エイサー」の演目を復活させようとする動きも出てきている。このように、沖縄の「エイサー」をめぐるのは、行政による民俗芸能の観光資源化と、実演者たちによる「真の伝統」の復活という、対照的な二つの動きがみられ、しかもそれらは相互に深く関連し合っている。今日の我が国における民俗芸能は、さまざまな立場の人々による、「民俗」や「伝統」をめぐる交錯した視線のなかで継承されており、もはやかつてのような伝統／観光といった二項対立的図式でとらえることは不可能である。

2. 調査期間と調査方法

本調査は、平成23年5月から同年10月の約6ヶ月間にわたる、沖縄市諸見里自治区で旧盆の時期におこなわれるエイサーの島廻りに参加および関与する人たちを対象におこなった、民族誌学的アプローチによるフィールドワークにもとづいている。平成23年6月

から始まった諸見里青年会のエイサー稽古から旧盆（本年は8月12日から14日）の島廻りと8月15日の「旗すがしー」およびいくつかのエイサーイベントにおいて、筆者は自治会員の立場として参与観察し約80名に対して聞き取り調査をおこなった。筆者はできるだけ同青年会の稽古、反省会や宴会に参加し、メンバーたちの言動を注意深く観察し記録するように心がけた。これは、そのような場にこそ彼らの日々の言動を理解する鍵があり、かつ、彼らとのコミュニケーションを促進する絶好の機会である時間でもあり、そのような場をできるだけ共有して理解し合うことが彼らの民俗芸能の実践をより理解することができると考えたからである。

3. 調査地概要

沖縄市は、北緯24度から27度の間に連なっている沖縄県の列島のうちの最大の島である沖縄本島東海岸の中城湾に面し、那覇市の北方約25キロメートルに位置し、面積49.0平方キロメートルの南北にやや細長い形をした、県内で2番目に人口の多い都市である。平成20年12月31日時点の住民基本台帳によると、沖縄市の世帯数51,504戸（前年比884増）、人口は133,809人（同731人増）で、38の自治会（基地内を含む）がある。筆者の調査地である諸見里は、沖縄市の南西部に位置し米軍の嘉手納飛行場に南接している地区である。平成20年の沖縄市住民基本台帳では、世帯数が2,029で人口は4,738人となっている。

沖縄市諸見里青年会（以下、諸見里青年会）は、男性39名、女性35名の総数74名で構成されている。役員の構成は、会長1名、副会長3名、会計1名、備品担当3名およびスポーツレクリエーション担当4名となっており、毎年4月あるいは5月に開催される青年会総会で選出される。諸見里青年会への加入資格は、青年会や自治会が主催する地域活動に参加が可能である、中学校卒業後から数え30歳までの男女というこ

とになっている。組織として、あるいは地域としての加入強制は一切なく、地縁や血縁などもその要件とされていない。したがって、自治区外居住者も加入することができ、現在では自治区外居住者が全体の過半数を占めるまでになっている。また、加入者は、青年会費などの経済的負担の必要はない。

4. 調査内容

(1) エイサーの歴史

沖縄には、1609年の島津侵入以前の現存する史料が乏しいこともあり、外国の史料の中からもエイサーに関連すると思われるものからその歴史を振り返る必要がある。エイサーに関連しているものが書かれている史料で最も古いと思われるものは、1478年の朝鮮漂流民である金非衣らが見た琉球王都での盆行事のことが書かれている『朝鮮王朝実録』で、次に古いものと思われるのは1562年来琉した冊封使である郭汝霖による『重編使琉球録』である。また、琉球王国の正史として1745年に編纂された『球陽』には旧盆行事に関しての記述がみられ、1713年に編纂された『琉球国由来記』には念仏とその実践についての記述が見られる。それらをまとめてみると、15世紀以降の琉球王国で盆の時期におこなわれていた芸能にはエイサーの練り歩きとの関連性を見ることができ、念仏がおこなわれていた時期やその記述内容を考え合わせると、念仏あるいは似念仏がエイサーの原形であると考えられる。

明治に入ると、エイサーは旧暦の7月15日の精霊送りの晩に、若者たち男女が広場に集合して三線伴奏に、男子はそれぞれ太鼓を打ち鳴らしつつ念仏歌を合唱しながら、女性はそれにあわせて踊った。男女青年たちが一団をなして、歌い踊りながら各戸を巡って焼香をするところもあった。首里、那覇ではエイサーが仏教と結びついていた頃はエイサーがおこなわれていたとされ、沖縄本島各地ではエイサーは村芝居と共に部落の民衆娯楽として催されるようになり、その内容は「仏教的」なものか農作物の予祝へと変わっていった。しかし、昭和10年代に入ってから、戦争の影響もあり、徐々にエイサーは取りやめられていった。戦後は、多くの地区が米軍の基地用地として接収されて、その住民は移住を強いられた。その中には、エイサーが盛んであった焼廻地区や仲原地区も含まれていた。1947年頃からは、各地で徐々にエイサーが復活されるようになった。そして、1956年に始まった

全島エイサーコンクールは、エイサーのスタイルは一変させ、さらには、エイサーを振興させるにあたって大きな役割を果たした。エイサーをしていなかった青年会がエイサーまつりで触発されてエイサーを導入したり、さらには、エイサーをしたいがために青年会を結成する地区も出てきたのである。

諸見里青年会の島廻りの際のエイサーは、旗頭、地謡、大太鼓、小太鼓、男手踊、女手踊およびサポート役により構成されている。その内訳人数は、途中での参加や離脱が頻繁にあるため常に変動するが、平成23年では常時40名以上で構成されていた。諸見里青年会によるエイサーで使用される曲は11曲で、すべての曲は途切れることなくつながって演奏されるため、踊りも途切れることはない。すべての曲をフルコースで演奏した際の所要時間は約20分である。諸見里エイサーを遡ると、昭和初期は子供エイサー（7歳から15歳まで）と青年エイサー（16歳から25歳まで）に分かれており、その年齢に該当する諸見里在住の男女全員が参加したという。そのうち、青年エイサーは一時期途絶えたが、エイサーの交流を特定の集落とおこなう習慣があったこともあり、昭和10年に再興された。島廻りは、旧盆は最終日と翌日の旗すがし一行事でも明け方未明までおこなわれていた。昭和16年頃まで島廻りはおこなわれていたようであるが戦争の影響で中断され、戦後すぐにエイサーは復活された。昭和31年に始まったエイサーコンクール以降に生じたエイサーのスタイルの変革に伴い、諸見里青年会もほかの青年会のエイサーを参考にして現在のスタイルに変更していった。その後、詳細は不明であるが、エイサーはいったん途切れ、昭和46年頃に再び復活させたようである。

(2) 諸見里青年会のエイサー稽古

旧盆の約2ヶ月前から、ほとんど毎晩20時から22時30分まで、公民館広場でエイサーの稽古がある。青年会メンバーは参加を強制されず、各自の仕事や学業などの予定が稽古参加よりも優先されている。稽古への参加人数は平均すると10数名で、20名を超えることはまれであった。途中、休憩は4から5回ほどあり、水分や塩分補給をしながら熟練者やOBから未熟練者に演舞の指導がなされる。技術面の指導で最も重点が置かれたのは、踊り手たちによるフェーシ（囃子、掛け声）であった。青年会の最大の悩みの種は、期間を通して参加人数が少ないということであり、常に参加者増加対策に追われていた。地域との関わりで

は、大きな音を出す稽古は22時までという地区住民との約束と、高校生は22時を目処に青年会が責任をもって帰宅させるという保護者との約束がある。そして、22時30分までは音を出さずに手踊りなどの稽古をする。稽古には、数人のOBが指導に来ることが多く、稽古の状況を真剣に観察し技術面や取組み姿勢などを適宜指導していた。

稽古が終了すると、公民館ロビーや広場で「ジャー」が開かれ、反省会がおこなわれる。稽古に参加したOBや仕事帰りのOBが参加するケースが多々ある。反省会では、踊りや歌の技術的な観点での会話よりも、エイサーへの取組み姿勢やものの考え方に関する会話の方が多く見受けられた。反省会は、たいてい1時頃まで、また、議論する問題が重要な時は5時頃までおこなわれることもあるが、メンバーが途中で帰宅することはとがめられない。反省会終了直後に青年会役員だけが残って、重要問題の討議や種々の確認のためのミーティングをすることもまれにある。

諸見里青年会にとって、本番に向けての予行演習のような位置づけになっているイベントには、平成23年は次の6つのイベントに参加した。

- 6月12日(日) エイサー・ナイト (沖縄市主催)
沖縄市
- 7月2日(土) エイサー・ナイト (沖縄市主催)
沖縄市
- 7月17日(日) 汗水祭 (八重瀬町具志頭青年会主催)
八重瀬町
- 7月24日(日) 風山祭 (実行委員会主催) 沖縄市
- 8月20日(土) 全島エイサーまつり (実行委員会主催)
沖縄市
- 8月28日(日) 中の町小学校盆踊り (PTA 主催)
沖縄市

(3) 諸見里青年会のエイサー島廻り

毎年の旧盆期間は沖縄市全体のあちらこちらから太鼓や三線の音が聞こえてくる。この3日間は沖縄市のほとんどの青年会が夕方以降夜半まで地元自治区を中心としてエイサーの練り歩きをする。諸見里青年会は、この3日間いずれの日も、学生や仕事で都合が付くメンバーやOBが早めに公民館入りし、音響機器や照明機器の調整や確認および飲料水、泡盛と食塩の軽トラックへの積み込み作業などが手早くなされていた。公民館広場の周りには近隣住民や観光客など100人ほどが取り囲むように集まっていた。

19時になると公民館広場での演舞が始まり、その

まま2列縦隊で道路へ踊り出た。先頭は旗頭、次に地謡、間に軽トラックを挟んで大太鼓、小太鼓、男手踊、女手踊の順番である。隊列の進む先々の道路では、OBたちが交通整理をおこなっており、隊列を優先させるため信号に関係なく通行車両を停止させたり、通行止めにさえした。夜間とはいえ常に30℃前後の気温と高い湿度のため、特に大太鼓と小太鼓の担当者は体力を激しく消耗させ、意識を朦朧とさせながらもなんとか踊っている者もいた。島廻りの途中3、4カ所で20分ほどの休憩があった。休憩場所は、個人宅の庭、居酒屋前やレストラン駐車場などであり、大太鼓と小太鼓の担当者たちのほとんどは道に倒れ込むようにして体を休め、彼らやOBたちに女手踊が用意されている飲食物を配り回り、OBたちは島廻り再開後の交通規制の要領を輪になって確認する作業に追われていた。国道に出ると、左側車線を隊列で占有して踊りながら練り歩いた。国道は交通量が多いため、OBたちは特に緊張感をもって通行する車に徐行を促し安全確保に注力していた。歩道には立錐の余地がないくらい多くのギャラリーが詰めかけていた。予定のコースを廻り終えると公民館に戻って広場で最後の演舞をおこない、島廻りが終了となる。広場の周りにはスタート時よりも多くのギャラリーが詰めかけていた。島廻り終了時間は、初日と二日目が午前1時頃、3日目が23時30分頃であり、3日間通算で約16時間30分も踊り廻ったことになる。

広場での演舞が終わると、青年会メンバーは後片付けに追われた。公民館内の一角では、寄付金受付担当者と青年会役員の何人かが料理には見向きもせず一心不乱に寄付金の集計作業をおこなっていた。片付けが終わったメンバーから順に席につき、食事を始めた。ほとんどのメンバーの食事が終わった頃を見計らって、青年会長と副会長の司会進行で反省会が始まった。反省会では、司会から指名された者がその場で発言をした。地謡やOBからは出来が悪かった点の指摘が多く、時には容赦のない叱責が飛んだ。それら多くのコメントを司会が総括し、その日に集まった寄付金額の報告がなされて、反省会は終了した。高校生は全員が帰宅させられた後は、懇親会の様相を示し、それが朝方まで続いた。

5. おわりに

史料が現存しないのでエイサーの歴史についての詳細はわかっていないが、第二次世界大戦後におけるエ

ポックメーカーキングな出来事として、1956年に現在の沖縄市で始まった全島エイサーコンクールが上げられる。多くの研究者が指摘する通り、このコンクールをきっかけとして、多くの青年会は、衣装を華美にしたり、太鼓を多用したり、テンポの速い民謡が採用されたり、隊形を複雑に変化させたりと、見せるためのエイサーにそのスタイルが一変された。それに伴って県内外にもエイサー人気が広まった結果、多くの観客がコンクールや旧盆のエイサー練り歩きに詰めかけるようになった。そして、そのことが、エイサーの担い手である沖縄市の各青年会にさらに見せるためのエイサーを追求させたり、自治体に観光客誘致の大きな手段としてエイサーを活用させる動きを促進させる結果となった。

諸見里青年会もこのような多くの青年会の例に漏れるものでなく、エイサーのスタイルも他の青年会と大きく変わらない。しかし、今回のフィールドワークによって知り得た彼らのエイサーという民俗芸能の伝承過程においては、ひたすら技術の習得を追求して単に見せるためのエイサーを完成させるというような考え方や取組み姿勢は薄かった。それよりも、彼らの最も大切にしている「先祖供養のためのエイサー」という思いが稽古期間中も常に強調され、旧盆の期間の島廻りでもギャラリーへ配慮はまったくと言ってもいいほどない。それよりも、その時期に「いたるところに帰ってきている、目には見えない」先祖たちに自分たちのエイサーを見てもらうために、体力の限界を超えて、細い路地も含めた自治区内をくまなく歩き回っているのである。そして、自分たちのエイサーを通して、自分たちが仲間と団結して「地域」のためになることを常に考えているということを、先祖にわかってもらおうとしているのである。彼らのエイサーは現在の主流であるスタイルには違いないが、彼らは新旧のスタイルにはまったくこだわっていない。どのようなスタイルであろうとも、先祖に自分たちの「地域」に対する思いをわかってもらうためのエイサーをしているのである。それは、決して「見せるため」のエイサーではない。つまり、彼らにとっての「伝統」とか「真正性」は、演舞の表面上に現れる技術やスタイルに関するものではなく、エイサーをするにあたっての考え方そのもののなのである。このことは、彼らが、「地域」に基盤をおいていない本土のエイサー愛好団

体のことを「エイサー」団体ではなく「太鼓集団」と呼ぶことや、OBによる彼らへの叱責は技術の巧拙に関するものよりも、かれらの団結力の希薄化の方に対してより向けられていたことから知ることができた。

もっとも、近年は青年会への加入者が減少している反面、「太鼓集団」に参加する若年層が多くなっていることから、彼らの考える「エイサー」というものは消滅する可能性があるという危機感が彼らの中で大きくなっている。そして、現在の青年会は「地域」外居住者の占める割合が過半数を占めている実態からも、「地域のためのエイサー」に彼らはいつまでこだわるのが可能なのか、また、こだわるができなくなったときにどのような変化が生じるのか、については民俗芸能に関してだけではない、伝承そのものを考えるにあたっての、今後の研究課題ともなる。

主要参考文献

- 安藤直子 2001 「観光人類学におけるホスト側の『オーセンティシティ』の多様性について：岩手県盛岡市の『チャグチャグ馬コ』と『さんさ踊り』を事例として」『民族学研究』66/3
- 大石泰夫 2007 『芸能の〈伝承現場〉論』ひつじ書房
- 岡本純也 1997 「民族舞踊と地域アイデンティティ」『研究年報』1997
- 2005 「シマの身体から沖縄の身体へ：エイサーを踊る身体史」『一橋大学スポーツ研究』24
- 2008 「民族舞踊の『型』の保存と演技の共同体：エイサーの伝承組織と村踊りの伝承組織の比較」沖縄市全島エイサーまつり実行委員会
- 1998 『エイサー360度—歴史と現在—』那覇出版社
- 川森博司 2001 「現代日本における観光と地域社会」『民族学研究』66/1
- 久万田晋 2011 『沖縄の民俗芸能論—神祭り、白太鼓からエイサーまで—』ボーダーインク
- 小林平造 2004 「集落活動の社会教育的意義に関する研究—内間青年会の字実践、担い手のライフヒストリー分析を中心に—」(h), (f)『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要』14
- 知名定寛 1994 『沖縄宗教史の研究』榕樹社
- 2008 「エイサー形式についての歴史学的考察」『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』創刊号
- 平山和彦 1992 『伝承と慣習の論理』吉川弘文館
- 宮下克也 2008 「記憶の覚醒と地域づくり：沖縄の都市近郊の事例から」『哲學』119
- 森田信也 1997 「観光と『伝統文化』の意識化：沖縄県竹富島の事例から」『日本民俗学』209
- 山城千秋 2003 「沖縄における地域の共同性と青年の主体形成を促す地域文化活動に関する研究」『九州大学大学院教育学研究紀要』6